

令和7年度【2025年度】とうきょう すくわくプログラム活動報告書

園名	荒川区立荒川さつき保育園
----	--------------

1. 活動のテーマ

<テーマ>

<自然>

土、草花、虫、光、音など身のまわりの自然に触れ、様々な事象を探求する。

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

広い園庭や畑、築山があり、季節ごとに植物や野菜を栽培したり、虫探しができたりし、豊かな自然環境を活かし、子どもの興味や関心、探求心が深められる活動が実施できると思ったため。

2. 活動スケジュール

・日常の子どもの遊びや活動を通して、興味関心を探りテーマを決め、子どもたちが関心を深められる素材や道具を準備し環境を構成する。環境探究活動を深めながら子どもの姿を通し保育の振り返りや環境構成の再構築していく。探究活動を通して保育の振り返りや築きをまとめていく。

5月 環境を考慮し、テーマを決める。

6月～ 子どもの姿から、問いを考え環境を構成する。

子どもの興味・関心のある事象について探求活動を実践する。

日々の保育の中で、子どもの姿や環境構成、保育士のかかわりなどを振り返り、より探究活動が深められるようにし、子ども姿や言葉、仕草、表情を捉えながら保育の振り返る。

子どもの姿や活動をドキュメンテーションにしていく。

12月～ 今までの活動をまとめ、保護者にも共有してもらえるような形を作っていく。

1月 活動報告書を作成する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

デジタルカメラ、水栓柱、ラックロック蛇口、地下散水ニップルセット、水中カメラ、水草、水槽、ボックスツイスター(ホース)、散水用糸入り耐圧ホース、SDHG/SDXCカード、スマート顕微鏡、懐中電灯、白い布、カラーフィルム、虫とり網、ワイドカップ樹液の森、リサイクルゴムレンガ、培養土、寒天、食紅、片栗粉、洗濯のり、ポスターカラー、木工用ボンド、ステンドーシート、セロハン、画用紙、バット、紙コップ等

※様々な材料や用具等、を子どもの手の届く場所に整備し、子どもの主体的な動きの中での気づきや発見を共有し探究活動を展開する。

4. 活動の内容

5、6月 春の自然に触れて遊ぶ、
虫探しやアゲハ蝶等を飼育し観察する。

水、土、泥に触れて遊ぶ。

7、8月 夏の自然に触れて遊ぶ。

水や氷、光や音等に触れたり、風を感じたりして、子どもが感じた不思議な体験を一緒に探求する。戸外の光を取り入れて遊ぶ。(ミニプラネタリウム、影絵など)

水の流れや破門、水草や生き物の成長を観察する。

草花の成長や虫の飼育等を通して、生体に興味関心を深め、自然の生態系を探求する。

野菜の収穫し、野菜の形や匂いに関心を探求する。

9～1月 秋や冬の自然に触れて遊ぶ。(落ち葉、実になる木、木の实、木枯らし、霜柱等)

光や影、色で遊ぶ。スクリーンに自分の影や物の影を映したり、色を加えたりしていく。

自然物を採取して調べたり、造形遊びや絵画遊び、表現遊びを楽しむ。

※各年齢ごとの発達に応じて環境を整え、子どもの感じていることを汲み取り共に考えたり、時には提案したり探求しながら子どもと一緒に様々な探求活動を進め、自然を五感で感じ、豊かな心の動きや育ちを援助していく。

令和7年 荒川さつき保育園 活動実践集

活動実践記録（0歳児）

1. 探究活動の実践（8月）

- ・セロファンスタンドグラスの光や色の不思議を楽しむ。
保育室内にスタンドグラスを作り、子どもたちの旧宮関心を引き出せるように働きかけた。

2. 振り返りによって得た保育士の気づき>

- ・手に届くように置いたり、遮光ネットにぶら下げてみたりした。興味を持った子どもたちがゴザの上に押し付けたり、壁に付けたり、ここにもあるよと指をさしたり、触りたいと抱っこを求めたりした。顔を近づけセロファン越しに周りを見たりする子もいたが、日差しが保育室に差し込む時間が限られてしまうため、子どもたちが身近に自然現象に触れる機会を多くし、発見したことを見逃さないようにしていきたい。

1. 探究活動の実践（10月）

- ・散歩(自然公園・東屋) <活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり>
- ・自然公園、東屋の屋根に池の水が反射して出来たキラキラした光に気付いた子どもが、指を差して「アッアッ」と言っていた。保育士が「キラキラしてるね」「きれいなね」と声を掛けると、その声に他児も気づき上を見る姿があった。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・水の反射に一番に気付くのが毎回同じ子だという事に気付いた。その子と保育士のやりとりを聞いて周りの子どももそれに気づき興味をもって見ていた。子どもが発見したことやその思いを共感しながら、他児にも共有できるように働きかけていくと共に、身近な自然環境に触れあえる機会を多く取り入れていきたい。

1. 探究活動の実践（11月）

- ・室内の床に「ちょうちょのスタンドグラス」が光で色が浮き出る。気づいた子どもが、指さし「アッアッ」と保育士の顔を見て知らせた。「きれいだね～」と保育士と一緒にしばらく浮き出たちょうちょを見つめた。
- ・保育士がちょうちょの上に手を置くと、手に色が映った。「??」と不思議そうな顔で保育士の手を見つめた後、自分の手や足を保育士と同じように置いてみる。色が映った手足を「オッオッ」と声を出してのぞき込む。雲で光が遮られちょうちょの姿が消えると「アレ??」と驚いた顔で自分の足を姿が見られた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・子ども達は光や光の変化に気付くと、声を出したり指をさしたりし保育士の方を見て教えてくれることが多く、発見したことを伝えてくれているので、発見した喜びや不思議な気持ち共感した。
- ・保育士や友だちが光で遊んでいることに気付くとそばに来て同じように試していた。
- ・光が見えなくなった時に保育士に声を出して伝えたり、手足を動かしてじっと見たりする姿があり、考えているような姿が見られた。

1. 探究活動の実践（12月）

- ・お花の公園の排水溝に葉っぱや石を入れて「ポチャン」という音や水が跳ねるところを見ていた。保育士が「石を入れると音するね」など声を掛けるとその声に他の子ども達も気づき真似をして石を拾って落とす姿があった。

また、天気が良く晴れている時は排水溝の中の水に映る自分を見て手を振る子どももいた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・初めは、保育士が石を入れているのを見て真似して楽しむ姿があった。後日、散歩に出かけた先でも排水溝を見つけると葉っぱや石を持ってきて入れようとしていた。楽しかった経験を覚えていて「あのとき遊んだのと同じだ（排水溝）」と繋がっているのだと感じた。
- ・石が大きくて排水溝の穴から入らないとしばらく頑張った後、違う石を探しに行く姿があった。子どもなりに考えてそうしたことがすごいなと感じた。

1. 探究活動の実践（1月）

- ・ほふく室に入ってくる日差しを鏡を使って天井に反射させてみた。（ぞうやうさぎの形の鏡）天井の光に気付いて上を見上げる子が多い中、保育士の真似をして鏡を持って天井に向ける。はじめは鏡が裏返しだったので何も写らない天井を不思議そうに見つめる。繰り返すうちに鏡の面が天井を向きゾウの形の光が写し出された。他児は嬉しそうに指を差して天井を見上げるが、鏡が上を見上げると鏡が下を向いてしまい天井からゾウが消える。それでもやめることなく、しばらく鏡を持って天井を見上げて光を探していた。



2 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・突然天井に現れた光に、子どもたちは“ナンダナンダ!!”と驚いた様子で動く光を目で追った。そんな中で保育者の持つ鏡に気づき、同じようやってみようとしたことや光がみつけれなくても根気よく続ける姿もあり、好奇心のエネルギーとはすごいものだと感じた。そんな劉の姿を真似て鏡を持って天井を見上げる子どもが次々と現れ、面白い！と心が動くことはどんどん広がっていくのだと感じた。

活動実践記録（1歳児）

1. 探究活動の実践（8月）

<活動の内容>（テーマに関する子どもの興味関心、クラスの特徴など）

- ・7～9月上旬 ベランダで色水遊びをしている際、タライの色水に光が反映していることに気づき、「キラキラだ」と教えてくれた子がいた。また0歳児クラスの際、カラーセロファンが反射し、床に色が映り、触ってみたり、手を置いて手の色が変わることに興味を示す姿があった。光は視覚的に変化があり、子どもたちが興味を示しているので、深めたいと思いテーマとして設定することにした。反射など子どもたちが気づき、光の変化などを楽しめるような環境を設定していく。
- ・ベランダに小さなステンドグラスを設置し、光を取り入れて子どもの姿や反応を見てみる。発見を共有し、子どもの興味関心を広げていく。

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

- ・光の反映に気づき、青や緑に映ったところに手を置いて色が変わることを楽しんでいた。最初は一人で光の反映に気づいて遊んでいたが、次第に周りにも子どもが集まってくる一緒に手や足をかざして楽しむ姿も見られた。手に色がついたのかと思ったのか、こすってみて不思議そうにする子どももいた。デュプロの人形の色がついたところに並べて色の変化を試す様子もあった。保育士は「赤くなったね」等、子どもの気づきを代弁し、共感した。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・ステンドグラスや光を通すようなものを色々作ってみたが上手く光が反映せず、難しさを感じた。子どもの反応・姿を見ながら、興味関心がさらに広がって遊びを楽しめるように今後も考えていきたい。

1. 探究活動の実践（9～10月）

<活動の内容>（活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり）

- ・光は視覚的に変化があり、子どもたちが興味を示しているので、深めたいと思いテーマとして設定することにした。反射など子どもたちが気づき、光の変化などを楽しめるような環境を設定していく。
- ・10月23日 影絵
午睡後、日差しが強く押し入れに日が当たっていた。押し入れに近づいて行ったAが自分の影が映ったことに気が付いて不思議そうに押し入れに触れる姿がありグーパーと手を動かして影が映ることを試していた。そばで見ていた保育士が同じように真似をして「うつってるね」と声を掛けた。保育士が手でキツネを作るとAも真似をして手でキツネを作って影絵を楽しんでいた。そのあとすぐにおやつの時間になり机の上に移動し椅子に座ると再び押し入れに向かってキツネを作るが、仕切りがあって影が映らなかった。Aは押し入れに影が映らないことについて「いないねー」と呟いた。保育士も「いないね」と共感すると今度はおいでおいでと手招きをした。キツネが出てこないことに気が付くとキツネに会いに行きたいと訴えていた。おやつ後にAとキツネやちょうちょの影を作って遊んでいると他児も影絵に気が付き、触ろうとしたり自分の手で作って楽しむ姿が見られた。
- ・10月24日 手作りカメラ
園庭でレンズ部分にカラーフィルムを貼った手作りカメラで遊ぶ。築山の上で足元にカメラを向け、地面に青い光が反射していることに気付く。光に触れようとして、手を伸ばすが、カメラが動いて光がなくな

ってしまい、つかむことが出来ず不思議そうな表情を浮かべていた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・ これまでも部屋に入ってきた光に気が付く姿があった。秋になり西日が強くなって光の入り広がったことで自分の影の存在に気が付くことが出来たのだと思う。・ A はあまり遊び込める姿がなかったが、おやつを挟んでもやりたいと訴え夢中になって遊ぶ姿があり新たな一面を知ることができた。
- ・ カメラとしてはよく遊んでいたが、天気あまり良くなかったため光が入らず色の変化や反射の気付きが少なかった。次回は天候の良い日に取り入れていきたい。

1. 探究活動の実践（11月）

- ・ 秋になり戸外遊びが増えたことで自然に触れて楽しむ姿が増えてきた。散歩時に落ち葉を拾って友だち同士で見せ合い楽しむ姿が見られたので、拾ったものを持ち帰ることができるように散歩バックを製作。
- ・ 11月11日 自然公園で落ち葉拾い・11月20日 園庭遊び・11月11日 自然公園へ散歩に行く。道端に落ちている葉っぱを見つける姿が見られたので、散歩バックを子どもたちに渡す。すると手あたり次第葉っぱを拾い、形の観察を楽しみながらバックの中に入れる姿が見られた。「つるつる～」と葉っぱの暗色を楽しんだり、穴の開いた葉っぱを見つけて覗いてみたり、木の実を見つける子もいた。
- ・ 11月20日 園庭で遊んでいると幼児が松の木の葉を拾っていた。その様子を見たAは興味を持って近づき、同じように落ちていた松の木の葉っぱを拾い触れてみる。他児も集まってきて葉っぱに触れる姿があった。しばらく集めることを楽しんでいたAがふと「どこからきたのかな」とつぶやいた。すると幼児が「あれだよ」と松の木を指して教えてくれ「そっか」と言うと拾った葉っぱを持って砂場へ向かっていった。Aは砂場にいた保育士に「みてみて」と手に持った松の葉の束を見せていた。「あそこからきたんだって」と幼児に教えてもらったことを伝え、その場所へ案内してくれていた。それから「かきかきー」と言いながらその束で地面に絵を描いて遊んでいた。再び砂場に戻るとBとともにままごとの中にその束を入れて混ぜ、料理の材料として遊び始めていた。



2 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・ 散歩バックを透明にしたことで目に見えて楽しむことができたのではないと思う。友だちのバックの中身も気にする姿があった。引き続きお散歩バックを持って出かけて、自然に触れる機会を作っていくたい。自然公園で落ち葉を拾って遊んだことで、以前よりも落ち葉に興味を持つ姿が見られるようになったと感じる。「どこからきたのかな」という子どものつぶやきに驚いたが、あえて答えずにいたところ、幼児が教えてくれたので関係性の良さを感じた。

1. 探究活動の実践（12月）

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・ 11月11日 自然公園で落ち葉拾い、11月20日 園庭遊び
- ・ 12月9日 自然公園に散歩、12月12日 自然公園の落ち葉街道へ遊びに行く
- ・ 落ち葉街道の落ち葉で遊んでいる際、歩きながら落ち葉を足で集めていた。それを見た保育士が「ブルドーザーみたいだね」と言うと、ブルドーザーになりきり 座り込んでお尻で進みながら落ち葉を集めていた。その後柵の向こうに落ち葉を投げ入れ今度はショベルカーになりきっていた。
- ・ 落ち葉の上に保育士が座り込み、足に落ち葉を掛けている姿を見て、近くにいたA児も真似して掛け始めた。そこにB、C、D、E児も集まってきて落ち葉を沢山持つと保育士の足の上に掛ける姿があった。A児が保育士の肩を押して倒れこむと、子どもたちが一斉に顔や身体に落ち葉を掛けて楽しむ姿があった。
- ・ A児が落ち葉をかき集めて水道の跡地に入れていた。そこにB、C、D児も来て蛇口の跡をシャワーに見立てて触ってみたり、B児が「Bちゃんおふろはいりたい」と言ってジャンプして入る姿があった。周りにいた子どもたちも真似して「3, 2, 1 ぎぶーん!」と入り、「きもちいいよ」と言いながら並んで 座り込んでいた。その後、C児が「ねんねのじかんだよ」と腕時計を指すような仕草をして、近くのベンチに「ねんね～」と言って 寝転ぶ姿があった。

*職員会議の時に、動画で子どもの姿を共有した。

2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・ 楽しく触れて“わくわく”を引き出した。落ち葉1つで子ども達のイメージが膨み、色んな見立て遊びができる子どもの力に驚いた。2回目の落ち葉遊びだったが、前回落ち葉に触れたがらなかった子も、今回は触れる姿があり、自然遊びも経験を得て楽しめるようになるということを感じた。

1. 探究活動の実践 (1月)

『冬の自然発見～氷に触れてみる～』

秋に葉っぱ遊びをたくさん楽しみ、園庭遊びでも自然物での遊びに興味を持つようになり、関心が広がっていた。また異年齢児を真似て、水を使った砂遊びが盛り上がっている。寒くなり、自然の変化を感じてほしいと思いテーマに設定した。

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

- ・ 最初は「つめた～い」と言って控えめに触っていたが、慣れるとシャベルで叩いて小さく割ったり、踏んでみたりと氷の変化を楽しんでいた。
- ・ 氷を上を持ち上げたA児。「きらきら～」と太陽の光を見ながら言っていた。
- ・ 木のベンチの上に友だちが遊んだ氷が落ちていることに気付いたB児。クレヨンで描くかのように氷を持ち、ベンチの上に氷で絵を描いていた。しばらく描いた後、「つめたいねえ～」としみじみとつぶやいていた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・ 1つの氷の素材でも様々な遊び方をしていて、子どもの発想のおもしろさを感じた。以前テーマを“ひかり”に設定していたが、今回子ども自ら光に気付く姿があり、繋がりを感じた。水を使った遊びに夢中になっていて、手が汚れることに抵抗感が以前より少なくなったからこそ、今回氷を試しながら遊ぶことに繋がったのではないかな。

活動実践記録（2歳児）

1. 探究活動の実践（8月）

<活動内容>

- ・子どもたちが水遊びで繰り返し、洗濯ごっこ、色水遊びなど楽しんでいる姿はあるが、慣れてきたためか、早々に終わる子も見られるようになった。水遊びに変化をつけてより遊びが楽しめるよう、ジュースの空パックに氷を作る。中に玩具を入れて凍らせた。作る際は、子どもたちと一緒に水と玩具を入れた。（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）
- ・触れて感触や冷たさを楽しんでいた。
- ・氷に水をかけているうちに、水がかかると溶けると気づいた様子。中に入っている玩具を取り出そうと氷を溶かし、取り出した玩具をバケツなどに集めていた。
- ・氷をしばらく持っているうちに「つめたい」「つるつるしてきもちい」→「つめたくてずっとはもてない」「つるつるすべる」と変化があったようだった。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

見たり触ったりして楽しもうと用意した氷だったが、水をかけると溶けるというのは、遊んでいるうちに子どもが自分で気づいていた。感触を楽しむだけでなく、取り出して集めることを楽しむ遊びになり、普段は水遊びにさほど乗り気でない子も自ら参加しようとしていたので、それだけ魅力的なものだったのだと思う。氷の形や色、中に入れるものなど、変化をつけることで、新たな発見や楽しみ方につながると思う。

1. 探究活動の実践（9～10月）

<活動内容>（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

- ・畑、園庭での自然とのふれあいの中で見つけた「あたらしい感触」
- ・畑で見つけたミズをつまんで「つめたい」「つるつるしている」と筒の形をした入れ物に入れてしばらくじっと見つめたり、指先でつついていた。
- ・水と砂を混ぜ、手やお玉ですくうと「おみそしるみたい」「とろとろ」「さらさら」と料理をするように遊んでいた。枯れた水草を泥水に浸し、「まぜまぜ」とかき混ぜたり、根っこの部分から垂れる泥水を見てたいして喜んでいる様子だった。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・砂や水だけでなく、生き物に触れたときの感触も興味を示している様子だった。
 - ・動いているもの、命のあるものの感触を子どもたちなりに表現したり、驚いている姿が新鮮で良かった。砂や土に水を加え、そのたびに变化していく感触や形状に「不思議」を感じている様子で泥団子を作る際も「なんでせんせいみたいにかたくならないの？」と水分を多く含んだ泥を握って疑問をもっている様子だった。自分で水を足したり混ぜてみたりと試行錯誤していた。
- 水遊びから、土、泥と遊びがさらに広がり子どもたちの探究心の深まりを感じた。季節の移り変わりの季節になっていくため、子どもの発見やつぶやきを丁寧に広げ、子どもと一緒に探究活動を楽しんでいく。

1. 探究活動の実践（11月）

- ・CDの反射した「光」を捕まえる！
(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)
- ・畑のCD ガーランドが反射し光が地面に映った。その光を持っていた虫取り網で捕まえる子どもたち。光が逃げないようにと手で覆う姿や足で踏む姿があった。
- ・「せんせい！はやくきてきらきらつかまえた」「いれものにいれて！」と子どもたち。
- ・光が動くと「あー逃げた」と再び光を追いかけていた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・光を生き物としてみていた子どもたち。「つかまえた！」と嬉しそうな顔が可愛らしかった。同時に「なんでとれないの？(手で)」と不思議そうな表情も見られた。何度も手で掴もうと試行錯誤している様子が見られた。光が動いたり消えたりするためその様子が「生き物」という認識を強くさせるようだった。

1. 探究活動の実践（12月）

- ・泥の感触を楽しむ。
(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)
- ・「つめたい」「きもちい」と水の冷たさを感じながらも自分で容器を選び、水道から水を汲んで運ぶことを楽しんでいる 姿が見られる。少々こぼしてしまうこともあるが「あーこぼしちゃった、もういっかい」と上手く運べるように子ども達なりに試行錯誤しながら繰り返している。思うように水を運ぶことができると「せんせいみてあんまりこぼれてない」と嬉しそうな顔。砂や土を混ぜて「コーヒー屋さん」「ジュース屋さん」等見立て遊び、ごっこ遊びをする姿が見られた。
- ・濡れたスポンジに泥水を染み込ませ「せんぎいつけたからおそうじしてるの」「むにむにしてる」と感触を楽しむ様子も見られた。



2 振り返りによって得た保育士の気づき

・改めてどろんこが大好きな子ども達の姿を見ることができた。冬になり、水も冷たく感じるが水の冷たさや洋服が濡れてしまうとどうなるか、どんな気持ちか、どのようにしたら水がこぼれないか等それぞれ子ども達なりに考えて、試行錯誤しながら遊んでいることが分かった。大人からしたら「あーこぼれそうだな」「びしょ濡れにして…」とネガティブな思考で考えてしまいがちだが、子ども達はその瞬間がなによりも楽しく、発見を思い切り楽しんでいるのだと分かった。大人は先のことを考えて結果がどうなるか予測できるため心配事や不安等リスクを考えてしまうが、子どもたちは「やりたいこと」「はじめてのこと」「発見」にまっしぐらで、全身で楽しみ、その世界に飛び込んでいくため前向きにポジティブに居ることができるのだと学んだ。

1. 探究活動の実践（1月）

・冬の自然(氷)に触れてみる。

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

・畑のビオトープに氷が張った。一枚の大きな円形の氷ができた。氷を容器から取り出そうとする子どもたち。なかなか持ち上げられなかったので幼児の子たちに手伝ってもらいながら取り出した。氷が割れてしまうと「こわれちゃった」と驚いた様子。手のひらより大きい氷をそれぞれ拾い上げ顔に近づけ向こう側を覗いてみたり、「つめたい」「つるつる」「きらきら」「かちかち」と氷の様子を子どもたちなりのことばで表現していた。さらに小さく割れた氷を拾い集め「ほうせきやさん」「こおりやさん」とごっこ遊びをしていた。



2 振り返りによって得た保育士の気づき

・冬になり、水も冷たく感じるが水の冷たさや濡れてしまったらどうなるかなど、子どもたちなりに考えながら遊んでいる様子が見られる。氷に触れたことで「かたい」「つめたい」「きらきら」「つるつる」など子どもたちの発見や驚きをことばとして聞き取る事が出来た。また、「おっきーい」「つめたい、もうもてない」「つるつるしちゃっておちちゃう」など氷を手にしたときの子どもたちの表情がそれぞれ異なり、可愛らしかった。「めだかさんもこおっちゃったかな」とビオトープ内のメダカを探す子もいた。ビオトープの底を探すとメダカが何匹か泳いでいて「こおってないね」と嬉しそうな笑顔を見せてくれた。氷に触れてみることで「水よりもつめたくて、形のあるもの」と感じている子もいて、物体として手で触れられる事が嬉しいのだと分かった。持ち上げたり、集めたり、ポッケに入れたり「肌身離さず持っていたい」「大切にしたい」という子どもたちの嬉しさが滲み出ていた。

活動実践記録（3歳児）

1. 探究活動の実践（8月）

<活動内容>

天気雨が降った時に、窓の外を見た子どもたちが「あかるいのにあめがふっててへんだね」と気づきながら話していたことや、登園時に保護者の真似をしてサングラスを着用している子が外したら眩しいという言葉が聞かれたり、太陽の光に興味をもっていたりしたため。

- ・ テンドカラーシートを窓に貼り、子どもたちが自由に見られるようにした。
- ・ カラーセロハンや色付きのクリアファイルを使ってカラースコープを作った。

8/18 突然の雨が降り、天気の変化に興味をもって見ている

8/19 部屋の窓にステンドカラーシートを貼る

8/22 水遊び、光遊び

ステンドカラーシートを窓に貼ったが、外からの光が部屋に入らず子どもたちの発見や気付きにはつながらなかった。そのため子どもが自分で持ち運んで探求できるようにカラースコープを作った。

子どもが自由にカラースコープを使って遊んだ。

<活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

水遊びではタライが水色のため、赤のカラースコープ入れてみると「むらさきみたい」や、水に沈めてみたことで「みて、しろくみえる」と色の変化に気付いていた。

下駄箱前では太陽の光によってカラースコープの色が地面に映り、「あ！ピンクだ！」と見つけたかと思うと「あれ、なくなった」と映ったり映らなくなったりすることに気付いていた。



2. 保育士の振り返りや気づき

保育室には光が入らず、ステンドカラーシートからの光も入らなかった。子どもたちは太陽がまぶしいということは理解しているが、カラースコープの色が地面に出てきたり消えたりすることは太陽の有無でなっていることにはまだ気づいていなかったもので、今後、園庭遊びの中で、子どもたちがどんな風に発見したり、気づいていくのかを楽しみにしていきたいと思った。遮光ネットの下で遊んでいたもので、水遊びの中で光を感じる事が少なかったもので、タライを太陽の下に置くなどしてどんな風に光を発見していくのか、子どもたちの言葉にしっかり耳を傾けていきたい。

1. 探究活動の実践（10月）

・ 虫や草花の観察 10/16 園庭で遊んでいた4歳児が赤ちゃんダンゴ虫を見つけ、顕微鏡を使ってダンゴ虫の目を探していた。顕微鏡を使うと小さな物が大きく見えることに気づき、園庭や畑から顕微鏡で見たいものを探して見ている。

・ 園庭からオシロイバナやカタツムリ、畑からピーマン、ダンゴ虫、花を持ってきてシャーレにのせて見ている。気になってシャーレを触ったり、動かしたりするので、ピント調節が大変だった。ピント調節は保育者が行った。

・ (活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり)

・ 気になるものを持ってくるだけの子や虫や花など画面に大きくなって見えることに驚く子等それぞれの姿が見られた。少しずつ子どもたちが集まってきて、ダンゴ虫が動いた時には「わぁうごいた」と言っている

たり、画面に手を振っていた。花や野菜では顔を画面に近づけて見られた。カタツムリはなかなか顔を出さず、シャーレを動かしてしまうので、殻のみ観察していた。ぼやけて見えていたものを保育者がピントを合わせると「おお～」と歓声もあがっていた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・虫かごの中で見ている虫や花や野菜とスマート顕微鏡から見る虫や草花の違いに驚いたり、画面をテレビのように見るなどそれぞれの姿が見られた。ピントの調整はまだ保育者が行っていくが、子どもたちがスマート顕微鏡の使い方や見方などを知る良いきっかけにつながったと思う。今後も図鑑で調べたり、見たりすること以外にも何だろう？などの不思議と感ずることをスマート顕微鏡で見ている中で発見や気づき、興味関心へと広げていきたい。

1. 探究活動の実践（11月）

- ・昨年度、木の妖精から手紙が届いてチューリップの球根を植えて育て、チューリップの花が咲き、喜んでいました。今年も木の妖精から手紙と花の種のプレゼントが届き、プランターと土を準備して種を植えた。
11/6 木の妖精から手紙と花の種のプレゼントを見つけ、プランター、土を運び、植えの準備をした。6種類の種があり、種の形や色の違いを見ながら植えた。
毎日水やりをする。
11/10 プランターに小さな芽が出ていることに気づく。
11/12 オシロイバナの種を見つけ、プランターに植えていた。
- ・園庭で遊んでいるときにクラスの入り口に手紙が来ていることに気づき、友だちに声を掛け、クラスみんなで中身を確認する。花の種のプレゼントも入っていて、みんなで植えをすることにしました。植えには何が必要か子どもたちと考え、プランター、土、太陽、水などの声があがり、子どもたちが畑や倉庫から運んで植えをした。毎日水やりをし、数日後にプランターから小さな芽が出ていることに気づき、友だちに知らせ、じっくり見ていた。植えしてからオシロイバナの種も植えると芽が出てくるのでは？ということで、オシロイバナの種を見つけるたびに種を植えている子もいる。

<活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり>



2 振り返りによって得た保育士の気づき

・自分たちが植えた種の入ったプランターが保育室の前にあるので、芽が出るなどの小さな変化に気づいて、友だちと一緒に喜んでいました。花の種、芽などそれぞれの違いを見て感じる事ができました。毎日水やりをして、生長を楽しみにしているので、花の図鑑などを見たり、調べたりして、次は芽から何が出てくるのかなど子どもたちの発見と一緒に喜んでいきたい。

1. 探究活動の実践（12月）

・園庭遊びをする中で影に関心が向くようになり、自分の影を見て手や足を動かしてみたり、手で形を作ったりしてたのしんでいる。

12/5 園庭遊び中に4歳児の重ねていたビールケースにのぼることを楽しんでいる中で、影の形について発見があった。

12/12 自然公園で影をつかった遊びに広がる。

（活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり）

【12/5】園庭で4歳児クラスの子が重ねたビールケースを上り下りすることを楽しんでいた際に、ふと地面を見て自分の影が映っていることに気づく。手を動かしてポーズをとるなどしながら影が動くのを見ているうちに、「あ！ハートがある！」とケースの影の隙間から漏れる光がハート型になっていることに気づく。「いっぱいある」「どこがハートなんだろう」とケースをキョロキョロと見回してハート型の穴を探すが見つからない。そこでハートの光を見ながら、ケースのいろいろな穴から指を出してみると「ここだ！」と光の漏れる穴を見つけて喜んでいました。その後、違う遊びをして時間が経って戻ってきたときにはハート型ではなくなっており、地面に指でハートを書いている姿があった。

【12/12】自然公園の芝生の広場で遊んでいたとき、保育士と子どもたちが並んで影をみて遊んでいると、一人の子が保育士の影を踏もうとするので保育士が踏まれないように逃げる。すると影を踏もうと追いかけて、自分の影が踏まれそうになると逃げている。



2 振り返りによって得た保育士の気づき

・夏に光についてカラスコープを作って気づきがあった時には影につなげることが難しかったが、戸外遊びや散歩の時間をたくさんとれるようになり、発見や気づきにつなげられたのだと思う。ビールケースの発見は偶然、日の当たり方とケースの重ね方がかみ合っただけだったため、常に子どもたちの気づきに共感していく姿勢が大切であると改めて感じた。また、自然公園では影を子どもが踏もうとしたことから追いかけて逃げたりと影踏み鬼ごっこのような遊びが自然と出来上がり、保育士がルールを導入しなくても子どもたち発信で遊びを思いついて楽しめるということに気づくことができた場面であった。これからも子どもたちの発見や気づきに共感し、発想を広げられるようにしていきたい。

1. 探究活動の実践（1月）

・氷、霜柱「氷ってどうしてできるんだろう？」「氷ってどうして冷たいんだろう」

・園庭の花壇や水道下のタライの水やビオトープの水が凍っていたことに気づいて喜んで見せてくれた。園庭に出ると氷や雪、霜柱探しをしている。

1/5…お正月休み明け、園庭に出ると1/2に降った雪の残りなのか、朝露が凍っていたのか、花壇に氷と霜

柱を見つけて喜んで見せてくれた。

1/22…昨夜降った雪が畑や花壇、砂場のシートの上に残っていて触って感触や冷たさを感じていた。

1/26…水を入れた容器を置いて、翌日の変化を見る。

(活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり)

1月5日…園庭遊びが始まると花壇や畑で氷や雪、霜柱を見つけ、喜んで知らせてくれた。氷を「ユニコーン」や「ハート」と形を見立て、溶けてくると「ユニコーンの頭がとれた」などと形の変化も楽しんでいった。手で氷を持つと冷たいので、シャベルですくってカップに入れ、土も混ざり、溶けてくると泥になっていく変化も楽しみ、泥を飲み物に見立てて遊んでいた。

1月22日…昨日の夜に降った雪が残っていて、粒のような雪を見つけていた。顕微鏡で見ることを提案し、一緒に見た。雪ははじめは白かったが、だんだんと透明になっていく変化を顕微鏡で見ることができた。氷も顕微鏡で見ると氷の柱も見え、驚いていた。雪を掌にのせていると水になってきて、冷たさを感じ、友だちとどっちの手が冷たいかをお互い触りあっていた。

1月26日…夕方、カップの容器に水を入れ、「明日カチコチになっているかも！」と楽しみにしていたが、翌日見てみると氷にはならず、とても冷たい水になっており「つめたい！」と言っていた。その日の夕方場所を変えて水を置いた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

・雨が降ってから気温が下がったり雪が降ったりしたことで、子どもたちが自然に触れて発見し、氷遊びや水遊びを楽しめた。氷の冷たさや氷が溶けていくこと等、遊びの中での気づきがありその思いを今後も受け止めていきたい。前日に置いた水がどう変化するか楽しみにしているので、これからも継続して子どもたちの発信や発想を大切にしていきたい。氷や影遊び等、クラスだよりで保護者へ知らせ、子どもたちとのやりとりにもつながっているという声が聞かれたので今後も継続して知らせていく。

活動実践記録（4歳児）

1. 探究活動の実践（8～9月）

<活動内容>（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

- ・水鉄砲をもった子が、友達や担任めがけて水をかけてきた。「つめたい」「やめて」という子が現れ、水がかかり「冷たいから嫌」と訴える子がいたため、どうしたらみんなが楽しく遊べるかを考え、そこから遮光ネットの外に撒くことを提案した。
「こっち（遮光ネットの外）に撒いたら跡もついて面白いよ」と声をかける。試した子が「ほんとだ、あとがつく。もっとやってみよう」「なんでだろう」「かわいてるからだ」やっていくうちに「どれだけとおくにとんだかもわかる」「ねえ、きょうそうしよう」とみんなでやり始め「せんせい！みて、あんなとおくまでとんだ」と嬉しそうに報告に来た。
- ・遮光ネットの際で並んで飛ばしあっこしている、保育者がホースで同じように撒くように飛ばしていた水が太陽の光で点々と花火の様に反射していることを発見。「すごい！ピカピカひかってみえる」「はなびみたい」「たいようにあたっているからだ」友達の声を聞いて、集まり「みえない。どこ？」「ここみえるよ」と光の反射が見えやすい角度を探しながら見ようとしていた。
- ・遮光ネットの下では、土の上に水が溜まり始め、「せんせい、したのみずあったかいね」「本当だ、さっきかけられた水は冷たかったのにね」「つちがたいようにあつためられたんだ」「え？じゃあ」と日向にホースで溜まった水の上に集まり始める。「せんせい。すごくあつたかーい」「おんせんみたいだ」と水だまりにみんなで座り、温泉に浸かってる様になり、笑いあっている。ひとりが泥んこを腕などに塗って「おんせんできれいになるの」「ツルツルになるの」と楽しんでいた。



- ・8/22『ビオプロ』のシャボン玉の時楽しかったが、「平らだといつものストローのシャボン玉より吹いても出しにくかったね」と自分たちが吹いても思うようにシャボン玉が出なかった事を思い出す。「持っただけでバーって出たとき見た？」「みたみた」「ドバーってでておもしろかった」（見ていた子が頷く）「何でドバーって出たんだろう？」「なぜがバーってふいたんだよ」「先生も見ていて面白いなーって思ってた、もっとやってみたい事思いついたんだけど1人じゃ難しいんだよね。みんな手伝ってくれるかな？」「いいよ。なにをするの？」「この『ビオプロ』を、たーくさんつなげて大きな板作ったらもっとドバーって出る気がしてさ…」「ドバドバドバーって？」「そう。でも、フーってしたら、この前少ししか出なくて大変だったじゃん」「もっとなぜがあつたらいいんじゃない？」「なぜにふいてもらえばいいよ」「でも今日みたいに風ない日もあるじゃん」「なぜおこせば？」「せんぷうきみたいに？」「うちわは？」「みんなでうちわでなぜつくればいいよ」「じゃあ、みんなでうちわ作るか」「つくる！」「じゃあ、先生が『ビオプロ』の大きな板作ったら、みんなバーって風起こしてくれる？」「いいよー」「ありがとう。楽しみになってきた。成功するかな？」とうちわを作ることになる。
- ・8/25～29 「うちわづくり」うちわの土台に紙を貼ったりクレヨンで描いたり思い思いに作っている。みんな作り終わると、担任のところに来て「いいかぜでてる？」「せいこうしそうなかぜきてる？」と仰ぎながら楽しそうに声をかけに来ていた。
- ・9/1 うちわでシャボン玉実験。うちわの台紙の硬さが足りなかったのか、何人もで仰ぐが思うようにシャボ

ン玉だ出ない。「でないね。」「かぜがたりないのかも」「いりよくがたりない」人数を増やすも、上手く出ない。「もっとなのかな?」「せんぷうきにたすけてもらう?」サーキュレーターを見つけ、「これは?」「やってみよう」ドバドバと出た泡にみんなで「うわー!!!」「もりもりでたー」「いりよくすごい」「あわたのしろう」

- ・9/2 サーキュレーターで出た沢山の泡で遊ぶ。水遊びの服だったので、風でモコモコ出る泡を全身で受け止めたり、色水のカップに乗せ「シュワシュワ（炭酸飲料）できた」と並べたり、バケツいっぱい集めている。「しゃぼんだまのえきにいろつけたら、いろつきのあわになるのかな?」という眩きに、クレープ紙をシャボン玉液に入れ、色を出してみる（赤）。「わーぴんくいろのあわになったー」と盛り上がる子どもたち。「走ったら出るかやってみよう」と保育士が板を持って走る。「わー！せんせいでてるでてる!」「やってみよう」子どもたちも順番やペアを決め、楽しみ始めた。角度によって「でなかったね」「こんどはせいこう」「はやくはしったらいいんじゃない?」「こうもったらいいんじゃない?」等考えながら楽しんでいた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・見えない風を偶然に感じたところから、こうしたら楽しいかもしれないということを子どもたちに提案し、夏の遊びに絡めて存分に遊びこみながら探求することができた。子どもの「できた」「すごい」という表情がとても生き生きしていて一緒に遊んでいて楽しかった。特に最後、どう走ったら沢山の泡が出るかを話しながら子どもたちでチャレンジし、「あー、あわたのしかったなー」と笑いあい満足した表情に、自然と探求し遊びこむことが出来たのだと思えた。

1. 探究活動の実践（12月）

- ・「なんでかげになるんだろうね」と保育者が聞くと「え?わかんないけど、みずいろがうすいからじゃない?」「おひさまがあるからだよ!」「きょうくもりだよ?」と悩んでいる様子があったがその場では結論が出ず遊びに集中していた。
- ・「こっちのかげはAくんだから、こっちはぜったいBくんだ」「おおきいかげだったからせんせいじゃない?せんせいとさっきあそんでたからとなりはDちゃんだよ!」と影あてだけでなくその日の友達の姿や交友関係を背景に話している姿もあった。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・光と影の関係性についてはなんとなく感じていながらも、深く理解している姿などはまだない。今まで触れてこなかった分野でもあるので少しずつ楽しみながら発見につなげていけたらと思う。
- ・一度ライトテーブルを使い遊んだことがあったが、使い方が難しく、なかなか影が出来なかったり、光の当て方が難しかったりと課題が残った。1度保育者間で確認して遊び方を検討しながら発見につなげていきたい。

1. 探究活動の実践（1月）

『氷はどうしてできるの？』

- ・園庭に遊びに出たところ、畑のビオトープの水が氷になっており、割ってみたり顕微鏡で見たりして楽しんでいた。A児の「こおりつくってみたい」から話が広がっていき、どうしたら水から氷になるのかを一緒に考え、その想像力が様々な意見を生み出し面白かったらから。

(活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり)

- ・A児が「こおりつくりたい」と言いバケツに水を汲んできた。「どうしたらみずからこおりにできるの？」と問いかけたところ「わかんない」と答える。「おともだちにきいてみたら？」と保育者が聞くと、氷遊びをしていたB児、C児にききに行く。B児が「つくりかたはわかんないけど、れいぞうこのなかでこおりできるよね」と言う。「でも、おそとはれいぞうこじゃないよ」とC児が笑う。「じゃあ、さむかったらできるのかな、でもれいぞうこみたいにさむいところある？」とA児。C児が「もしかして、せんせいたちれいぞうこにいれたの」とビオトープのバケツを指さす。「いれてないよ～」と保育者がいうとB児が「じゃあできるだけさむいばしょにおこう」という。A児は「おひさまがあたらないところ！」と言い置く場所を決めはじめた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・結果的に子どもたちが考えて置いた水は、次の日には氷になっていなかった。気づきや子どもたちの考えを大切にできなかったため、位置の調整や言葉はかけなかった。氷になっていなかったと残念そうにしていたが「もういいや、わかんない」と子どもの興味が続かなかった。寒い日はまだまだ続くので、この気づきもとりいれながら、もう一度じっくりと考えられる機会を作っていきたい。また、置いた場所はかろうじて日陰だったが水の量が極端に少なかった。水の量が日の光以外にも関係しているところまでは、現段階では結びつかないと思うが、何度も失敗し、子どもたちの力で答えに導いてほしい。

活動実践記録（5歳児）

1. 探究活動の実践（8月）＜活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり＞

<活動の内容>

8月14日（木） カブトムシの罠を仕掛ける

- ・クラスでカブトムシを飼育し、餌や掃除用具などは子どもたちが自由に手に取ることのできる場所に置いていた。
- ・クラスで飼育しているカブトムシにゼリーをあげていると男児B「このゼリーでカブトムシのわなをしかけたい」と話し、周りにいた子どもたちも賛同する。男児Bが保育士に説明し、保育士も賛同すると嬉しそうに園庭に出た。
- ・園庭に出て桜の木に向かい、男児Aが桜の木の根本にゼリーを置く。男児Bが「そんなした（下）にはこないんじゃない？」と言ったため二人で他の置ける場所を探すと木の幹に窪みを見つけたため置いて罠を仕掛けることにした。その後何度か罠を見に行くが「なんにもいないね」と話す子どもたちの中で男児Cが「カブトムシはよるうごくからいまはこないかもね」と言うと「そうか、じゃああしたみにこよう」と男児Aも納得した。

8月15日（金）次の日ゼリーを見に行くとゼリーは減っているがカブトムシはいない。「カブトムシはいないね」 罠を確認する「しっばいかー」「ちかくにアリがいるね。へっているゼリーはアリがたべたのかも」「じゃあこのゼリーはアリにぜんぶあげちゃおうか」と子どもたちは話し、窪みにゼリーを戻した。男児Aは「つぎのしかけかんがえてみる！」とやる気いっぱい話した。



1. 探究活動の実践（10月）

<活動の内容>

令和7年10月7日（火）園庭や畑で遊ぶ

- ・ビオトープの中にヤゴがいるのを見つけた女児Aと男児Bが虫かごにヤゴと水を入れ、その中に葉や石を入れるために園庭に出た。
- ・男児Bが花壇から南天の葉を取って女児Aに渡す。女児Aが水槽に入れたり出したりしていると「え！このはっぱ、みずにいれてるのにだしてもぬれてない！」と水から出した葉が水を弾き手で触れても濡れていないことに気が付く。男児Bがキョウチクトウの葉をちぎり「これもやってみよう」と水に入れてみると同じように濡れないことに気が付き二人で不思議がる。男児Bが「これは？」とコカモメヅルの葉を入れてみると「これはぬれるね」と発見した。二人それぞれの葉を出し入れして比べた。出し入れした葉を地面に置くとコカモメヅルは砂がつくことにも気が付いた



2. 振り返りによって得た保育士の気づき>

・ヤゴのために葉をいれてあげようという思いやりの気持ちから葉の新たな発見に繋がり、実験し不思議を面白い姿から、子どもの探求心や好奇心の高まりを感じた。次々と遊びが移り変わってしまい発見をさらに広げていくことができず、その後欠席児が多かったり運動会への取り組みがあったりしたことで二人の発見を友だちに知らせるような環境を作れなかったことが反省である。虫に興味をもっている子どもたちが多いがこの機会に植物への関心にも繋げたい。

1. 探究活動の実践（11月）

・おままごと中に地面がキラリと光り、一瞬止まって「なんだこれ」と言う小菅。近くにあるものを持ってみたり観察したり、一人黙々と光のもとを探していると、金や銀の丸い板を持った時に再びキラリと光り「これだ！」と目を輝かせる。その後は自分の足や地面を光らせようと、また一人黙々と板の向きを様々なに変化させるなど試行錯誤していた。しばらくすると保育士や友だちに「あしひかるから、みてて！」と言い、自分の足を光らせると誇らしそうに「ほらね」と言う。



2 振り返りによって得た保育士の気づき

・光を発見した子どもが、光の発生源や作り方を探求し、自分の大発見を友だちや保育者にいきいきとした表情で教えてくれる、とてもかわいらしく面白い場面であった。子どもの発見に気付きつつも、今回はあえて声をかけずにそばで見守っていたことで、一人黙々と探求する姿に繋がったのではないかと思う。子どもの探求心を育むには保育者が声をかけすぎないことも必要であると改めて感じたとともに、光についての興味関心を深めることができる環境を整えていきたい。

1. 探究活動の実践（12月）

・12/1 女児Aは園庭に落ちていた岩を拾い、それをたまたま落としてしまう。すると割れた岩の断面がきらきらと光っていることを見つけ、もう一度落としてみる。何度か落として欠片がでてくることを楽しんだ後、女児Bが「けずってみる？」と言うと、岩を削り始めた。男児Cも面白さに気付き一緒に始める。
(活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり)

・断面を見て「きれい！」と感動する。高いところから落としてみたり、岩を石で削ってみたり、地面にこすりつけてみたりする。男児Cはマルチパーツの隙間に岩が挟まることを見つけ、工夫しながら削っていた。「ちょっときらきらがみえてきたかな～」「どれ？あ、ほんとだね」などと岩のことを話したり、他愛もない話をしたりと岩に集中しながらも友だちとの会話を楽しんでいた。40分程じっくりと岩削りに集中していた。保育者は近くで見守り、一緒に会話を楽しんだり、子どもたちのやり方を真似て同じように岩削りをやってみた。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・偶然起きたことから発見や感動があり、自然の面白さを改めて感じた。よく考えどうにか断面を多くしてきらきらさせようと工夫する姿から思考力が育まれていることを感じ、探求心の高まりを感じた。子どもの姿を見守るだけでなく一緒にやってみると、大人も夢中になってしまうような体験だった。岩に集中しながらも会話を楽しむ空間に心地よさも感じられた。時間に余裕をもち、じっくりと集中できる環境であったことでこのような体験ができたと思い、時間と環境の大切さを実感した。

1. 探究活動の実践（1月）

『ザリガニを描きたい！』

- ・子どもたちは日頃から当番活動としてザリガニやメダカの世話をしている。愛情をもって育てている中で、松本はボールに入ったザリガニをよく観察しながら絵を描き始めた。それに気付いた子どもたちは次の日、ボールに入ったザリガニを飼育ケースに移し替えていた。

（活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり）

- ・ザリガニと紙を行ったり来たりしながらザリガニの絵を描いていることに気づき、「どうやってかいたの？」と保育者が尋ねると、ボールに入ったザリガニを見せて「これみてかいた」という。興味を持った他の子が集まってきている中、「どうして？」と聞くと、「こっち（飼育ケース）のザリガニは、かくれてるからみえないもん」という。他の子も「ほんとだ〜」とじっと見比べていた。次の日になると、その様子を見ていた子たちが園庭遊び中に倉庫から飼育ケースを出してきて、夕方になると協力して移し替える姿があった。



2. 振り返りによって得た保育士の気づき

- ・子どもたちが毎日の当番活動で生き物にたくさん触れてきたことで、生き物に親しみをもち、いたわり大切にしようとする気持ちで関わる姿に繋がったのではないかと感じた。松本はザリガニを大好きなお絵描きで表現するなど、遊びの中にも取り入れて楽しむ姿があり、お世話を通して生き物に対する興味や好奇心、探求心が深まっていたことを感じた。また、周りの子どもたちも2匹のザリガニの飼育環境の違いに気づき、考え、行動した姿に、思考力の育ちを感じることができた。